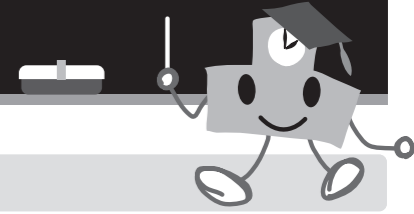


小学校の事例 南区 真駒内緑小学校

区の「花いっぱい運動」に参加。全校で花を植える活動に発展。

児童の目に入り実感できる「花いっぱい運動」を発展させ、自主的な全校での栽培活動に。身近な自然を守り、育てる心が芽生えはじめる。



内容 一部の子供たちの参加から 全校の活動に

本校では市の「マイタウン・マイフラワー事業」や区の「花いっぱい運動」の事業に参加し、校区内の通りに植栽する活動を行っている。平成20年度までは放課後の時間に参加したい子供たちが活動していたものが、平成21年度から全学年が栽培できるカリキュラムへと発展。生活科の中で1年生がアサガオを、

2年生がミニトマトを植え、3年生～6年生は総合的な学習の時間で「花いっぱい運動」に参加している。玄関横のマリーゴールド



効果 さらに広がった植栽への関心

「花いっぱい運動」では、地域の連合会や土木事務所から苗を提供いただき、植え方を教えてもらう。植えた花は通学中にパッと目に入るものなので、華やかな印象。街の美化になると同時に、子ども自身が「地域の役に立ったんだ!」と実感できる取組となっている。また、そこから自分たちが住んでいる街の環境を見直すことにつながり、「花植えに参加するだけ」から

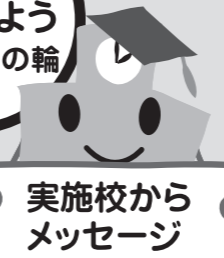
「自分たちの手で」という意識が芽生えはじめている。この活動をきっかけに「学校のまわりにも花を植えたい」という子供たちの声があがった。4年生は教室の窓下に種から育てたマリーゴールドの苗を植え、5・6年生は数種類の苗を組み合わせ、体育館前の花壇をデザインするなど、子供たちの積極的な緑化活動へと広がり、身近な自然を守りたいという心を育てている。

課題 苗や土づくりなどの課題の解決へ

5・6年生の苗は学校予算で購入した。しかし、花壇の土があまりよくない場合は入れ替えをしたり、新しい土を追加しなければならず、学校予算の範囲で補う

のは限界がある。苗や土づくりは、費用や人員確保、そして時間が課題となっている。

広げよう つなげよう 環境学習の輪



教育委員会で行われている「さっぽろっこ農業体験事業」に、移動に使用するバスが無料だったこともあり、参加してみたところ、非常によい体験ができました。体験学習をとおして、現在の学校の枠では実施できないことを体験できるので、時間に余裕があればもっと参加してみたいと思います。

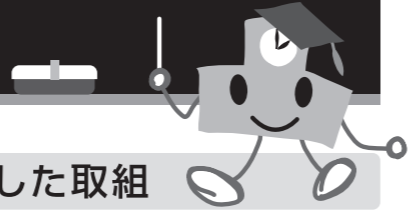
「環境問題」は今の子供たちには切実な問題なのですが、希望をもって取組めるような配慮が必要だと思えます。子供たちには「今は問題がたくさんあるけれど、環境がよくなるように、世界中の人々も取組んでいて、科学も発達するから希望があるんだよ、がんばろうね」ということも忘れずに伝えたいです。

実施校からメッセージ

小学校の事例 清田区 美しが丘緑小学校

前庭は花いっぱい。心もはずむ環境活動。

町内会から苗の寄贈。資源物回収の収益金でプランターを購入。全クラスでの「花育」から環境へ。



内容 全校での栽培活動 PTAなども一緒に協力した取組

本校では、開校(平成9年)以来、花の栽培活動に全校で取組んでいる。苗は町内会から寄付されている5種類500株を使用。各学級2つのプランターに苗を植え、前庭(玄関前)に並べている。プランターに植える際のレイアウトも児童自ら考えている。

水やりは登校時に行っており、学級によって、係や当番制など様々な方法で行っている。児童で植えきれなかった苗は、PTAに呼びかけて協力を募り、本校職員と一緒に歩道のマスタ花壇に植えている。



前庭のプランター①

町内会から苗をいただく際には「お花を受け取るセレモニー」を開催。児童の代表として3・4年生が参加している。プランターは、校内で取組んでいる紙、牛乳パック・段ボール・新聞紙などの資源回収物の収益金で購入した。一度の資源物回収で得られる収益金は1,000～2,000円程度。児童へ還元できるような収益金の使い道を探していたことから、その収益金でプランターを購入するに至った。

今後 花育から広く環境活動へ 自発的に育てるように

日常的に花の世話をしていること、目につきやすいところに植えられていることから、花を育て、緑を増やす環境意識が自然と高まっている。

時には、児童が水やりを忘れてしまうことがある。そのような場合は、「自分もご飯をもらえなかったらどう思う?」などと、花も人間と同じように生きていることを実感できる、また、児童が自発的に行動できるような声かけを行っている。



前庭のプランター②

広げよう つなげよう 環境学習の輪



実施校からメッセージ

非常に状態のよい苗を寄贈していただいております、子供たちは感謝の気持ちを込めて大切に育てています。そのためにも保護者の協力は必須なので、理解を得ながら取組んでいこうと考えています。